

水盤の王さま

小川未明

青空文庫

去年きよねんの寒い冬ふゆのころから、今年ことしの春はるにかけて、たった一ぴきしか金魚きんぎよが生き残のこつて

いませんでした。その金魚きんぎよは友ともだちもなく、親おやや、兄きょうだい弟だいというものもなく、まった

くの独ひとりぼつちで、さびしそうに水盤すいばんの中なかを泳およぎまわっていました。

「兄にいさん、この金魚きんぎよは、ほんとうに強つよい金魚きんぎよですこと。たった一つになつても、元氣げんき

よく遊あそんでいますのね。」と、妹いもうとがいました。

「ああ、金魚屋きんぎよやがきたら、五、六ぴき買かつて、入いれてやろうね。」と、兄あには答こたえました。

ある日ひのこと、あちらの横道よこみちを、金魚売きんぎようりの通とおる呼よび声こゑが聞きこえました。

「兄にいさん、金魚売きんぎようりですよ。」と、妹いもうとは耳みみを立たてながらいました。

「金魚きんぎよやい——金魚きんぎよやい——。」

「早くはやいつて、呼よんでおいでよ。」と、兄あにはいました。

妹いもうとは、急いそいで馳かけてゆきました。やがて金魚屋きんぎよやがおけをかついでやつてきました。そ

のとき、お母かあさんも、いちばん末すえの弟おとうとも、戸口とぐちまで出でて金魚きんぎよを見みました。そして、小ちいさ

な金魚きんぎよを五かひき買かいました。

水盤すいばんの中なかに、五きんぎよひきの金魚きんぎよを入いれてやりますと、去年きよねんからいた金魚きんぎよは、にわか

ににぎやかになつたのでたいへんに喜んだように見えました。しかし、自分の中なかでいちばん大きなものですから、王さまのごとく先頭せんとうに立つて水の中みずなかを泳いでいました。後あとから、その子供のようこどもに、小さな五ひきの金魚きんぎよが泳いでいたのです。これがため水盤すいばんの中なかまでが明るくなつたのであります。

「兄さん、ほんとうに楽しそうなのね。」と、妹は、水盤すいばんの中なかをのぞいていました。

「今度、金魚屋きんぎよやがきたら、もつと大きいのを買つて入れよう。」と、兄はちやうど、金魚きんぎよの背中せなかが日の光に輝ひかりいているのを見ながらいました。

「けんかをしないでしょうか？」と、妹は、そのことを氣遣きづかつたのであります。しかし、兄は、もつと美しい金魚きんぎよを買つて入れるということより、ほかのことは考えていませんでした。

「金魚きんぎよやい——金魚きんぎよやい——。」

二度めに、金魚屋きんぎよやがやつてきたときに、兄は、お母さんから三ひきの大きい金魚きんぎよを買つてもらいました。それらは、いままでいた大きな金魚きんぎよよりも、みんな大きかつたのです。かえつて、水盤すいばんの中なかはそうぞうしくなりました。けれど、去年きよねんからいた一ひきの金魚きんぎよは、この家は、やはり自分の家じぶんうちだというふううに、悠々ゆうゆうとして水の面おもてを泳いでい

ました。五ひきの小さな金魚は、おそれたのであるか、すみの方に寄ってじっとしていました。三びきの新しく仲間入りをした金魚のうち二ひきは、ちよいとようすが変わつたので驚いたというふうで、ぼんやりとしていましたが、その中一ひきは生まれつきの乱暴者とみえて、遠慮もなく水の中を走りまわっていました。

三びきの金魚の入ってきたのをあまり気にも止めないようすで、前からいた一びきの金魚は、長い間すみ慣れた水盤の中を、さも自分の家でも歩くように泳いでいますと、ふいに不遠慮な一ひきが横合いから、その金魚をつつきました。

「あんまり威張るものでない。だれの家と、きまつたわけではないだろう。そんなにすまさなくてもいいはずだ。」と、ののしるごとく思われました。

前からいた金魚は、相手にならないで、やはりすましたふうで泳いでいますと、乱暴者は、ますます意地悪くその後を追いかけたのです。こんな有り様でありましたから、いつしか五ひきの小さな金魚は夜のうちに、みんな乱暴者のために殺されてしまいました。一月ばかり後まで、生き残っていたのは、前からいる金魚と乱暴者と、もう一びきの金魚と、わずかに三びきでありました。

「兄さん、金魚は弱いものね。今度死んでしまったら、もう飼うことはよしでしょうね

。「と、妹はいいました。

「ああ、金魚よりこいのほうが強いかもしれないよ。」と、兄は答えました。

「兄さん、こいを買っておくれ、毎晩、夜店に売っているから。」と、末の弟がいいました。

その日のことであります。暮れ方、妹は、末の弟をつれて夜店を見にいつて、歸りに三寸ばかりの強そうな赤と黒と斑のこいを二ひき買ってきました。そして、それを水盤の中に放ったのです。

月の照らす下で、水面にさざなみをたてて、こいの跳る音を聞きました。それから四、五日もたつと、三びきの金魚は、みんなこいのために、つかれて殺されてしまいました。後には、二ひきのこいだけが元氣よく泳ぎまわっていました。

「とうとう、こいが天下を取ってしまった。」と、兄はいいました。

「ほんとうに憎いこいですこと。」と、妹はいいました。

一日、兄は留守でした。妹は憎らしいこいだからといって、毎日換えてやる水を怠りました。たつた、一日でしたけれど、あつい日であつたもので、水が煮えて、さすがに威張っていたこいも死んでしまいました。そのときからすでに幾日もたちました。いまだ

に水^{すい}盤^{ばん}の中^{なか}はだれの天下^{てんか}でもなく、
まったく空^{から}になっています。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷

1981（昭和56）年1月6日第7刷

初出：「時事新報」

1921（大正10）年7月31日

※表題は底本では、「水盤《すいばん》の王《おう》さま」となっています。

※初出時の表題は「水盤の王様」です。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2014年2月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

水盤の王さま

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>